

アクティブラーニングと教員養成教育

田中 暁龍

1. アクティブラーニングと自己の問題関心

現在、初等教育から高等教育に至るまで、「アクティブ・ラーニング」が教育の主題として掲げられ、この観点から学習・指導方法を改善していくために必要な力を養成することが教員養成の目標の一つに掲げられている。そして次期学習指導要領では、高校地歴科に、近現代史の世界史と日本史との融合科目(仮)「歴史総合」が設置されることになったが、これまで西洋史・東洋史・世界史・日本史等の科目で推移してきた動きが大きな転換点を迎えようとしており、こうした動向にいかに対応していくべきかは大きな課題である。

一方、自己の研究にかかわる問題として、平成 25～27 年度科研費(基盤研究(B)) (課題番号:25285249)に続き、平成 28～31 年度科研費(基盤研究(B)) (課題番号:16H03801)を受けて、高校向けの日韓共通歴史教材(古代～近現代)の作成を目指しているが、この教材の特色としては、「資料」と「設問」で構成する教材案で、いかに優れた「問い」を設定するかが重要であり、まさにアクティブラーニングの中心的課題とクロスしている。

加えて、昨今のアクティブラーニングをめぐるのは、教育現場のニーズや学生の興味・関心もその方法論にウェイトがおかれがちで、内容論の深まりが乏しいといった課題もみられる。教職志望の学生もアクティブラーニングへの指向を強める者もいるが、そうした現状にあって、落ち着いて内容論に目を向けさせ、育成していく必要がある。

2. アクティブラーニングのまえに

学生指導の過程で気づくことの一つが、小・中学校教育における様々な課題である。原稿用紙の使い方を筆頭に、語尾の不統一、接続語の使い方等に課題がみられ、このほか主述関係の乱れ、書き言葉と話し言葉の混同なども挙げられる。こうした現状に鑑みて、教職課程では、数年前より、読書を促すため、「履修カルテ」(ポートフォリオ的に学習成果を振り返るノート)において、継続的な読書感想文の作成を指導の一つとしている。具体的

には、教職課程登録時の作文「教員志望の理由」に始まり、2年次の読書感想文「創立者から学ぶ」、3年次の「教育者から学ぶ」、4年次の「教科教育に学ぶ」というように、年次的に課題作文・課題読書感想文を課している。そして、学習意欲と教員志望に対する自覚の喚起、課題の発見等をねらいとして、継続的な個別面談を行っている。加えて、教職科目においては、可能な限り、教師側の講義一辺倒の授業ではなく、グループによる学生参加型授業と、省察および振り返りの授業を展開している。

おそらくは上記のような基礎学力の課題を確認しつつ、継続的かつ段階的な手当を行い、粘り強く個別面談を通して指導を行う必要がある、そうした基盤形成の上にアクティブラーニングを据えていく必要がある。

3. アクティブラーニングの実践

「社会」の免許取得を希望する学生は、教育法の授業として2年春学期に「中等社会科・地理歴史科教育法Ⅰ」、秋学期に「中等社会科・地理歴史科教育法Ⅱ」、3年春学期に「中等社会科・公民科教育法Ⅰ」、秋学期に「中等社会科・公民科教育法Ⅱ」、という段階で履修を行う。このため、この4つの科目は、ほぼ同じメンバーで学び続け、段階的に社会科教育法の学びを深めていくことになる。

その際、毎学期、「漢字の書き順」「都道府県名・県庁所在地」「社会科基本用語」「中学校の地理・歴史・公民分野の基礎事項」など、社会科の基礎学力の確認を行う試験を行い、かつ様々な課題を通して、指導法に対する知識や技能等を深めることにしている。

例えば2年春学期の「中等社会科・地理歴史科教育法Ⅰ」では、「私のうけた中・高の社会科・地理歴史科の授業」をレポートすることによって学生の学習状況を把握しているが、多くの学生がチョーク&トークの授業が中心で「社会は暗記科目」だと認識してきたこと、プリントを用いた穴埋め式授業が広く行われ、その有効性を認め自分でもそうした授業を進めていきたいという考えを持っていること、などが確認できる。ここでは、学生が一間一答式にキーワードを覚えることを学習の主眼としており、そうした学生の教育観や指導観の相対化が必要とされている。そこで、評価の問題を考えるきっかけとして、「作問」レポートを課し、中学歴史的分野において、「思考・判断・表現」「資料活用の技能」のいずれか1つを評価する問題を1問作成して提出させている。提出後、作成した「作問」を持ち寄って討議を行うと、生徒に思考を促す「問い」の難しさに気づく者が多い。

また、3年春学期の「中等社会科・公民科教育法Ⅰ」では、新聞学習にこだわって授業の展開を行っている。最終的に「新聞スクラップ」の提出も課しているが、学期当初に「グ

ループ新聞の作成」を行うとともに、「新聞を活用した教材開発」もレポートさせている。ここで新聞を教材として活用させるとともに、新聞学習の幅広い意義を考えさせ、実際に学習指導での活用の留意点や方法について考えさせるきっかけとしている。

以上、指導法の一部を紹介したが、こうした活動は、個々の授業の活動もあるが、概ね講義から演習〈課題研究・発表・討論〉へ、さらに模擬授業・振り返り、といった展開をとっていくとともに、個人研究からグループ研究へ、さらには個人研究(模擬授業)へと進めていき、少しずつ課題を乗り越えていくことを意図している。

教員養成教育におけるアクティブラーニングの問題を考えるうえで、今後の課題としては、学生の授業構想における「問い」をさらに鍛える必要があること、2年間にわたる教科教育法のカリキュラムマップを構築するなどカリキュラムの検討を進めること、教科の先生方との連携をさらに深めていくこと、学生の地域から見つめる視点を育てる—例えば、大学の所在地の特色から「武相学」から見つめる—必要があること、などがあげられる。



田中 暁龍